

## 地域共生社会における美術館の在り方と公共性 —アート・コミュニケーション事業から考える市民参加と第三の場—

中嶋 厚樹

### 1 はじめに

「地域共生社会」とは、制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が『我が事』として参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えて『丸ごと』つながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会である。<sup>1)</sup>

厚生労働省は、近年改革の基本コンセプトとして、「地域共生社会」の実現を掲げ、「地域共生社会」を提案する背景として、「かつて我が国では、地域の相互扶助や家族同士の助け合いなど、地域・家庭・職場といった人々の生活の様々な場面において、支え合いの機能が存在した。しかし、高齢化や人口減少が進み、地域・家庭・職場という人々の生活領域における支え合いの基盤は弱まっており、暮らしにおける人と人とのつながりが弱まる中、これを再構築することで、人生における様々な困難に直面した場合でも、誰もが役割を持ち、お互いが配慮し存在を認め合い、そして時に支え合うことで、孤立せずにその人らしい生活を送ることができるような社会としていくことが求められている」としている。<sup>2)</sup>

地域共生社会において、公共施設としての美術館にはどんな社会的役割が求められているのか、どのように在るべきだろうか。

2020年、新型コロナウイルス感染症の流行拡大に伴い、美術館を取り巻く環境も大きく変化し、対人距離の確保や来館者の安全確保、従事者の安全確保、清掃、消毒、換気といった対策や入館可能時間の制限や入館可能人数の制限、日時指定予約といった過密解消、感染拡大防止に向けた様々な取り組みが行われ、運営面においても大きな転換を余儀なくされている。

また、新型コロナウイルス感染症の流行拡大以前

の2019年には日本で初めてICOM<sup>3)</sup>京都大会が開催され、プライナリーセッションとして時代とともに変化し再編されてきた博物館の目的、方針、活動について博物館定義の再考が議論された。新型コロナウイルス感染症の流行拡大がなかったとしても近年が博物館の歴史においても一つの転換点であり、美術館の役割や在り方も見直される時期にあった。

本稿では、このような時代の転換点の中で、地域共生社会における美術館の在り方や社会的役割を考え、美術館を活用した実践事例を通じてその特徴を考察し、まちづくりの提案を行うことを目的とする。

はじめに美術館の社会的役割について、博物館世代論や近年の政策から将来型の美術館の在り方について考える。その中で、現代における美術館の新たな役割の実践事例として東京都美術館、東京藝術大学による「とびらプロジェクト」を取り上げ、現代社会のキーワードでもある社会包摂<sup>4)</sup>やサードプレイス<sup>5)</sup>という二つの点に着目した上で、実践事例により得られる効果を検討し、最後に三鷹市へアート・コミュニケーション事業の導入検討とアートを活用したまちづくり提案をする。

建築家の西沢立衛は美術館の公共性について、「日本の公立美術館の多くは、いわゆる箱もの行政の典型だといわれてきましたが、本当は公共の美術館というものは、行政だけがやるのではなくて、官民間問わずにいろんな人間が参加して、能動的につくっていくものだと思います。美術館は行政の占有物ではなくて、町の財産です。自分の町の一部であって、毎日自分たちが使っている電車とか、道路とか公園とか、そういうものと同等のものです。個人個人が自分のスタイルで使ったり楽しんだりすべきものだし、町に美術館があることを町の人が誇れる、そういうものなのです。そのような公共性、公共空間は、時代が変わるにつれて、また参加する個人の個性に

応じて、変わっていくものだと思います。」(西沢 2010 : 19-20) と述べている。

三鷹市において美術館に多くの人が集い、まさに町に美術館があることを町の人が誇れる地域美術館の在り方を提案したい。

RQ1: これからの美術館に求められる社会的役割とは。

RQ2: アート・コミュニケーション事業の特徴や効果とは。

RQ3: 市民が集い、市民がつくる美術館を三鷹市に実現するには。

## 2 美術館の社会的役割の変遷

これまでの美術館の社会的役割について、はじめに伊藤寿朗によって示されている博物館世代論からみていくことにする。

### 2.1 博物館世代論

伊藤寿朗は、博物館の活動の内容は時代に沿って変化しているとして博物館を三つの世代に分け、第一世代は、国宝や天然記念物など稀少価値のある資料(宝物)を中心に、その保存を運営の軸とする古典的な博物館であるとし、第二世代は稀少資料だけでなく、さまざまな観点から集めた資料を積極的に公開することを運営の軸としているとしている。そして、第三世代は社会が求める課題にもとづいて資料の価値を発見し、つくりあげていく、市民の参加を運営の軸とする将来の博物館像とした上で、参加するという継続的な利用を通じて知的探求心をはぐくみ、住民の日常的利用が可能となる場所にあることを条件に、関心の薄い人をこそ対象にし、受け身の学習ではなく、学ぶ力を育てることを目的としている。さらに、参加中心の第三世代の博物館への転換のカギになるのは継続的な利用者(リピーター)を重視するかどうかであるとし、圧倒的多数が一過性の利用にとどまる中で、集会室や各種の教育事業など継続的な活動の場や条件の整備に努力している館では、新しい利用スタイルが確実に育っていると述べている。(伊藤 1991 : 9-16)

博物館という施設が、稀少価値のあるものを保存

する施設から、公開する施設、そして、市民参加を運営の軸とする施設に時代とともに変化してきている中で、これからの博物館の活動に市民参加をキーワードに挙げているところに注目したい。美術館という施設においても同様に、保存や公開にとどまらず、市民参加が特に地域の美術館においても重要な要素であるだろう。

### 2.2 博物館の社会的役割

近年の博物館をめぐる提言や法律から博物館の社会的役割に着目してみると、文部省が生涯学習審議会の答申「社会の変化に対応した今後の社会教育行政のあり方について」(1998年)に打ち出された「公立博物館の設置及び運営に関する基準」(1973年文部省告示)の大綱化・弾力化を契機に、日本博物館協会が文部省(当時)の委嘱を受け、2000年には『対話と連携』の博物館—理解への対話・行動への連携—【市民とともに創る新時代博物館】を作成している。

その要旨では、21世紀にふさわしい「望ましい博物館」を、知識社会における新しい市民需要に応えるため、「対話と連携」を運営の基軸に据え、市民とともに新しい価値を創造し、生涯学習活動の中核として機能する新時代の博物館であるとしている。

2003年の「博物館の望ましい姿」では、「市民の視点に立ち、市民と共に創る博物館」を実現するため、3つの視点に基づきそのあり方が設定され、2007年の「新しい時代の博物館制度の在り方」には博物館に求められる役割については、「集めて、伝える」博物館の基本的な活動に加えて、市民とともに「資料を探求」し、知の楽しみを「分かちあう」博物館文化の創造へと示されている(文部科学省 2007 : 4)。

2006年の「公立博物館の設置及び運営上の望ましい基準」改正を経て、2011年には、「博物館の設置及び運営上の望ましい基準」(文部科学省告示)が制定されている。

2018年3月に閣議決定された、文化芸術推進基本計画では、今後の文化芸術政策の目指すべき姿として、「美術館、博物館、図書館等は、文化芸術の保存・継承、創造、交流、発信の拠点のみならず、地域の生涯学習活動、国際交流活動、ボランティア活動や観光等の拠点など幅広い役割を有している。また、教育機関・福祉機関・医療機関等の関係団体と連携

して様々な社会的課題を解決する場としてその役割を果たすことが求められている。」とされている（文化庁 2018：6）。

近年のこうした変遷を見てみると、「対話と連携」をキーワードとして議論が積み重ねられ、「市民参加」が一貫して意識されてきていることがわかる。

### 2.3 アート・コミュニケーション事業とは

2012年より東京都美術館、東京藝術大学では市民を含めた三者で構成されるソーシャルデザインプロジェクト「とびらプロジェクト」を展開している。

アート・コミュニケーション事業の出発点は、「東京都美術館が取り組むべき新規事業の内容とその規模～『人間にとっての表現の意味』を追求する新・東京都美術館をめざして～」と題された 2007 年の文化制度検討部会答申にあるとし、アート・コミュニケーション事業の目的は「アート・リテラシーの向上、作品とのコミュニケーションの促進」、事業内容は「作品とのコミュニケーションに力点を置いた教育普及、鑑賞教育的な視点からの企画・展示等」とある（稲庭・伊藤 2018：17）。

また、同答申では新・東京都美術館の基本的使命（ミッション）として、大規模改修を機に、美術へのアクセシビリティや美術のコミュニケーション力、多様な芸術の創造活動を重視し、主体的な美術の活動拠点を目指し、4つの基本理念が掲げられている。

- ① 新しい芸術表現や表現者の発掘と育成
- ② アート・リテラシーの涵養
- ③ 創造と表現活動に対する支援
- ④ 多様な芸術作品や表現の鑑賞機会の提供

その4つの基本理念実現のために行う事業展開として、新・公募／企画事業とともに掲げられているのがアート・コミュニケーション事業である（文化制度部会 2007）。

## 3 アート・コミュニケーション事業の実践事例

本章では、アート・コミュニケーション事業の実践事例として「とびらプロジェクト」を具体的に取り上げる。概要とともに、どのような場になっているのか、各地へのアート・コミュニケーション事業の広がりについても触れたい。

### 3.1 東京都美術館×東京藝術大学「とびらプロジェクト」の概要（とびらプロジェクト2020）

「とびらプロジェクト」は、美術館を拠点にアートを介してコミュニティを育むソーシャルデザインプロジェクトであり、アート・コミュニケータ「とびラー」<sup>6)</sup>と、学芸員や大学の教員、そして第一線で活躍中の専門家がともに美術館を拠点に、そこにある文化資源を活かしながら、人と作品、人と人、人と場所をつなぐ活動を展開している。

とびラーは任期3年、会社員や学生、教員、専業主婦や退職後の方など18歳以上の様々な方から構成され、アートを介して誰もがフラットに参加できる対話の場をデザインし、様々な価値観をもつ多様な人々（図1）を結び付けるコミュニティのデザインに取り組んでいる。ボランティアな活動ではあるが、美術館のサポーターではなく、学芸員や大学の教員などの専門家とともに活動する能動的なプレイ

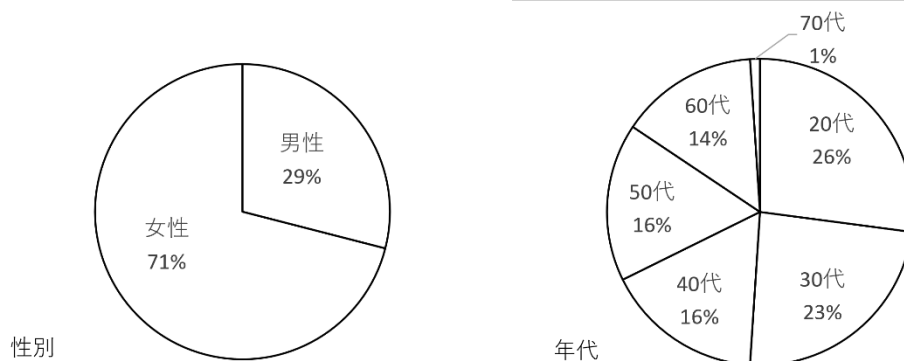


図1（稲庭・伊藤 2018：47） 2018年度とびラー属性 147名

ヤーであり、学ぶことと実践することを繰り返していく。

### 3.2 東京都美術館×東京藝術大学「とびらプロジェクト」の実践事例

とびらプロジェクトでは最初の3か月で美術館での活動とはどのようなものか、対話やクリエイティブなコミュニケーションが生まれる場づくりなど新しいコミュニティづくりの基本を学ぶ基礎講座を受講する。

引き続き実践講座では、専門の外部講師や学芸員、大学の教員が担当し、3つの実践講座のうち1つ以上を選択する。

- ① 鑑賞実践講座（モノと人を考える）
- ② アクセス実践講座（人と人を考える）
- ③ 建築実践講座（ハコと人を考える）

こうした実践講座は、様々な視点で美術館の在り方が考えられているが、一方向的な学びの提供にとどまらず、参加者同士の意見交換や対話が重視されており、様々な世代の多様な人材がその場を共有している強みが活かされている。

また、「とびらボ」と呼ばれるアート・コミュニケータが自発的に開催するミーティングで新しいプロジェクトの検討と発信が行われる場があることも特徴的である。新しいアイデアが思いついたら、「この指とまれ！」で3人以上集まったら活動がスタートする“この指とまれ式”とそこにいる人全員でアイデアを重ね、出来ることを考える“そこにいる人が全て式”でオリジナルの活動が生まれ、アートを介したコミュニケーションの可能性を広げている。

「とびらボ」は実践講座と並行して、随時、活動、解散を繰り返していく。

様々な世代の主体的な市民参加が実現し、美術館という活動拠点で様々な思考錯誤が行われ、その中心には常に対話が重視されている場となっている。

任期があることも、何となく参加するのではなく、限りある時間の中での主体的な参加を促し、活動に良い緊張感を与えている。

### 3.3 アート・コミュニケーション事業の広がり<sup>7)</sup>

アートを介したソーシャルデザインプロジェクト自体も、地域性を考慮し、形は違うものの、全国に広がりつつある。各ホームページに記載のある主な各活動拠点と概要は以下のとおり。

- ① 札幌文化芸術交流センターSCARTS アートコミュニケーター「ひらく」  
札幌文化芸術交流センター（指定管理者：公益財団法人札幌市芸術文化財団）を拠点にアートコミュニケーター「ひらく」が市民とアートのつなぎ手として活動している。2020年度第二期。
- ② 岐阜県美術館 アートコミュニケーター「～ながラー」  
2019年11月リニューアルオープンを機に、美術館内にコミュニケーションルームを設置し、新ビジョンである「美とふれあい、美と会話し、美を楽しむ」を実現する試みとして、アートコミュニケーター「～ながラー」を設置。  
2020年度第一期。
- ③ たいけん美じゅつ場VIVA「トリバア」  
産官学連携のまちづくりの取り組みとして、取手市、東京藝術大学、JR東日本東京支社、株式会社アトレが連携。取手駅ビル「ボックスヒル取手」4階に活動の拠点を2019年12月に設置。（運営委託：NPO法人取手アートプロジェクトオフィス）2020年度第一期。
- ④ うーばープロジェクト アート・コミュニケータ「うーばー」  
宇部市から委託を受けた一般財団法人宇部市文化創造財団が事業主体。2021年に市制100周年を迎えるにあたり、アートを介した新たなコミュニティ（UBEアートコミュニティ）を創出し、持続可能なまちづくり、地域活性化を目指す、「うーばープロジェクト」を実施。2020年度第一期。
- ⑤ 長野県立美術館  
「出会いと学びの場」の実現のための試みとし

て、アート・コミュニケータを募集し、美術館内にアート・コミュニケータールームを設置する。2020年度第一期。

事業の主体や活動拠点は美術館であったり、市から委託を受けた公益法人であったり、市と大学と民間企業であったりと様々である他、活動内容も異なる面があり、その地域の規模や特性に合わせてそれぞれの形で取り組まれている。

また、2021年11月に新たに整備される八戸市美術館は、アートを介した社会参画のプラットフォームの形成を打ち出し、「よりよい地域づくりのためには、様々な属性の人々がそれぞれ自分も社会の一員であり、自分にも何かできるという自己肯定力を備え、他者との連携・協働しながら、地域課題に向き合う必要があります。このため、アートを介して異なる分野同士が出会い、つながり、誰もが自由にフラットな立場で対話したり、何かをつくるなどの機会を創出し、地域を作り変えていく、アートを介した社会参画のプラットフォームを形成します。」として、①アートファーマー、②ソーシャルサロンをあげている（八戸市 2020：8-9）。

#### ① アートファーマー

「アートコミュニケーター」という新しい概念を取り入れ、美術館活動に関わる市民を、アートでコミュニティを耕し育む「アートファーマー」と位置づけ、アートファーマーが美術館のスタッフや専門家などとともに学び、美術と人との関わりを考え、企画立案し実践するなど、人とつながりながら、様々な経験ができる環境を整えます。

#### ② ソーシャルサロン

子どもから年配の方まで世代や立場に関係なく、あらゆる人々が自然な形で社会参画できるフラットな関係性を生み出せる場を美術館の中に恒常的に持てるよう、ジャイアントルームを中心に、アートや美術館への関心の程度に関わらず、誰にとっても居心地が良く、様々な過ごし方や活動が可能な場をつくります。

八戸市美術館の取り組みで注目すべきところは、建物の設計段階からアート・コミュニケーション事

業を行うことを前提にした、展示室と同等のジャイアントルームと呼ばれる活動スペースを意図的に設置し、新しい美術館の中核の事業として、アートを介した社会参画のプラットフォームを整備していることにあり、新しい時代の美術館の在り方としても注目されている。

## 4 社会包摂と市民参加

本章では、現代社会においても注目すべき社会包摂とサードプレイスという概念について、近年の文化政策やアート・コミュニケーション事業との関連性を示していく。

### 4.1 美術館における社会包摂

社会包摂とは、社会的に弱い立場に置かれている人たちを排除するのではなく、包摂する社会を築いていこうという考え方で、1990年代にヨーロッパで、「社会的排除」の対になる概念として生まれた。

はじめに、近年の文化政策における社会包摂の位置づけを確認する。

文化芸術の振興に関する基本的な方針－文化芸術資源で未来をつくる－（第4次基本方針）（平成27年5月22日閣議決定）では、基本的視点として、「文化芸術は、成熟社会における成長の源泉、国家への威信付与、地域への愛着の深化、周辺ビジネスへの波及効果、将来世代のために継承すべき価値といった社会的便益（外部性）を有する公共財である。また、文化芸術は、子供・若者や、高齢者、障害者、在留外国人等にも社会参加の機会をひらく社会包摂の機能を有している。このような認識の下、従来、社会的費用として捉える向きもあつた文化芸術への公的支援に関する考え方を転換し、社会的必要性に基づく戦略的な投資と捉え直す。」と公共財・社会包摂機能の必要性について記述されている。

また、文化芸術推進基本計画－文化芸術の「多様な価値」を活かして、未来をつくる－（第1期）（平成30年3月6日閣議決定）では「文化芸術活動に触れられる機会を、子供から高齢者まで、障害者や在留外国人などが生涯を通じて、あらゆる地域で容易に享受できる環境を整えるよう促すとともに、地域における多様な文化芸術を振興するなど、文化によ

る多様な価値観の形成と地域の包摂的環境の推進による文化芸術の社会的価値の醸成を図る。」と記述され（文化庁 2018：21）、また「文化芸術は、人々が文化芸術の場に参加する機会を通じて、多様な価値観を尊重し、他者との相互理解が進むという社会包摂の機能を有していることを示すとともに、子供から高齢者まで、障害者や在留外国人などが生涯を通じて、居住する地域にかかわらず等しく文化芸術活動に触れられる機会を享受できる環境を整えることが望まれている」としている（文化庁 2018：9）。

こうしたなかでとびらプロジェクトでは、アクセス実践講座の実践の場として「障害のある方のための特別鑑賞会」が特別展ごとに休館日を利用して一日行われ、身体障害者手帳・愛の手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・被爆者健康手帳などをお持ちの方とその介助者（1名まで）を招待している。アート・コミュニケータは、鑑賞のサポートを行うほか、障がい者との対話を通じて、社会包摂について考え、美術館の在り方について学ぶ機会となっている。

近年の文化政策で社会包摂が意識されており、これからの美術館に求められる役割としての社会包摂の視点を、東京都美術館ではアート・コミュニケーション事業という形で実践が行われており、アート・コミュニケータとして学びや経験を深める機会となっている。

## 4.2 サードプレイスとしての美術館

サードプレイスとは、アメリカの社会学者レイ・オルデンバーグが提唱した概念であり、都市社会において、潤いのある地域社会が消滅しているのではないかという問題意識によって、その必要性が主張されている。家庭を第一の場、学校や職場を第二の場とした上で、第三の場を「サードプレイスというのは、家庭と仕事の領域を超えた個々人の、定期的で自発的でインフォーマルな、お楽しみの集いのために場を提供する、さまざまな公共の場所の総称である。」（オルデンバーグ 2013：59）と定義している。

サードプレイスの重要な要素として、「都市とその近隣住区が、わたしたちにその可能性を約束しているとおりに豊かで多様な交流を提供するには、人の集まってくる〈中立の領域〉がなければならない。

個人が自由に出入りでき、誰も接待役を引き受けずに済み、全員がくつろいで居心地よいと感じる、そんな場所がなければならない。」（前掲書：68）とし、さらに、人を平等にする場所をレヴェラーとしたうえで、「レヴェラーである場所は、その性質からして、誰でも受け入れる場所だ。一般大衆にも敷居が低く、正式な会員資格や入場拒否の基準がない。人間は、自分の社会階級に最も近い人びとのなかから仲間や友人や親友を選びがちだ。

しかし、堅苦しいつきあいが可能性を狭め、制約を加えがちなのに対して、サードプレイスは可能性を広げる働きをする。誰にでも門戸を開き、社会的身分差とは無縁の資質を重視することによって、サードプレイスは、他者の受け入れに制約を加えようとする傾向を阻止する。」（前掲書：70）と述べられている。

また、基本的かつ持続的な活動の土台として「中立の領域が場所を提供し、平等化があらゆるサードプレイスの基本的かつ持続的な活動の土台をつくる。その活動とは、会話にはかならない。そこでのおしゃべりが素敵であること、そしてそれが活発で、機知に富み、華やかで、魅力的であることこそ、サードプレイスというもの何よりも明確に表している。」（前掲書：74）と述べている。

中立性、平等性、そして会話が重要視されることで活発で魅力的なサードプレイスが成立することについて、あらためてアート・コミュニケーション事業に当てはめてみると、アート・コミュニケーション事業の活動自体が、アートを介したゆるやかなつながりであり、様々なバックボーンを持つ様々な年代の人が分け隔てなく参加できることでの中立性、平等性が担保されていること、そして、その活動の中心はコミュニケーション、つまり会話であることから、魅力的なサードプレイスとして機能する可能性を感じられるだろう。

しいて条件を付け加えるならば、家庭や学校、職場のような強固な絆はサードプレイスには必要ない。第三の場が有効的に活用されるために必要なのは柔軟性のあるゆるやかな絆であり、それが担保され、重要視されることで、アート・コミュニケーション事業がより有機的に機能する。

## 5 三鷹市へのまちづくり提案

三鷹市における文化政策や公益財団法人三鷹市スポーツと文化財団が指定管理者となっている三鷹市美術ギャラリーの現状について聞き取り調査結果を示し、アート・コミュニケーション事業導入のためのまちづくり提案を行う。

### 5.1 三鷹市における文化政策

2020年3月に確定した、『第4次三鷹基本計画(第2次改定)』を見ていくと、三鷹市では「高環境・高福祉のまちづくり」を進める8つの施策があり、その一つに、「7.創造性と豊かさをひろげる生涯学習・文化のまちをつくる」がある。

現在の課題として、「芸術・文化のまちづくりでは、三鷹市にゆかりの深い文学者の顕彰事業のさらなる展開や芸術・文化に触れる機会の充実、文化施設の効果的な保全・活用を進めるとともに、三鷹型エコミュージアム<sup>8)</sup>の全市的な活動の展開に向けた取り組みが重要となります。」とされ、さらに今後の施策の方向性として、「文化の薫り高い三鷹を進めるため、芸術文化の振興と市民の文化活動の活性化をめざし、担い手の育成や教育普及活動等を進めるとともに、地域文化財を活用した三鷹型エコミュージアム事業の展開を図ります。」とある(三鷹市 2020:33)。

三鷹型エコミュージアム事業が中心の一つであるが、文化政策として、芸術・文化に触れる機会の充実や、芸術文化の振興と市民の文化活動の活性化をめざした担い手の育成などが示されている。

また、「8.ふれあいと協働で進める市民自治のまちをつくる」では、主要事業として、全庁を対象にした「学び」と「コミュニティ」が融合したまちづくりの推進が掲げられ、少子高齢化の進展により、地域における活動やコミュニティの担い手不足が課題となっている点が指摘され、「学び」と「コミュニティ」が融合した、活動の循環と世代間の継承のための新たな仕組みづくりを検討する旨や地域で主体的に取り組まれている「学びと活動」の実態調査や活動している市民、団体等の声を取り入れ、住民協議会の役割も含めて将来を見据えた地域の活性化につながる具体的な方策の研究を進めると記されている。

三鷹市の文化政策について現状を把握するため、

三鷹市スポーツと文化部芸術文化課課長の井上仁氏に聞き取り調査を行った。

#### ■インタビュー

日時：2021年1月18日(月)15時～16時

場所：三鷹市役所第二庁舎2階

インタビュー形式：対面

インタビュー技法：非構造化インタビュー(スクリプト未作成)

インタビュー相手：井上仁氏(三鷹市スポーツと文化部芸術文化課 課長)

インタビュー目的：三鷹市の文化政策の概要の把握

#### ① 文化政策の現状について

- ・コミュニティ行政という言葉があるが、三鷹市でも市民の声を大切にする意識及び“参加と協働”というキーワードが文化行政に限らず、行政全般にある。出来ていること、いないことももちろんあるが、市民の声を聞きながら市民と一緒につくられる活動や市民主体の活動、地元住民やコミュニティセンターを中心とした活動などが芸術文化の面においても中心にある。
- ・三鷹市芸術文化協会には芸術部門、芸能部門、文化部門があり、それぞれの団体が所属する形であるが、活動は市民主体で行われている。
- ・公益財団法人三鷹市スポーツと文化財団では市民に優れた芸術文化の提供と市民の自主的な芸術文化活動の奨励、援助を行うことを目的として様々な事業を行っており、特に担い手の育成という面ではみたくジュニア・オーケストラの運営などが挙げられる。また近年スポーツ事業、生涯学習事業も含めて、総合的に行っている。
- ・生涯学習センターでも市民大学事業が行われており、三鷹市スポーツと文化財団と連携しながら、芸術文化に興味がある市民に生涯学習センターを利用するきっかけを提供している。
- ・三鷹型エコミュージアム事業も新たな取り組みとしてスタートしている。
- ・現状の課題としては、基本計画にもあるが、地域における活動やコミュニティの少子高齢化やコミュニティの在り方の変化、近所づきあいの減少など地域におけるコミュニティの希薄化による担い手の不足、高齢化があり、世代間継承も含めて市民の声を聞きながら解決していく必要がある。

主に基本計画に記載されている「7. 創造性と豊かさをひろげる生涯学習・文化のまちをつくる」と「8. ふれあいと協働で進める市民自治のまちをつくる」について話を伺い、市民主体に活動が行われている歴史やコミュニティ行政という言葉にあるように市民の声を聞きながら協働でつくりあげていく三鷹市の行政としての全般的な考え方について聞くことができた。

一方で、課題とされるコミュニティの少子高齢化やコミュニティの在り方の変化といったコミュニティの希薄化は、サードプレイスとしてどうかという見方をすれば、改善の余地が大いにあるだろう。中立性、平等性、そして会話が重要視されることで活発で魅力的なサードプレイスとなるために様々な世代が参加しやすい大胆な組織改革の必要があるのではないだろうか。

そういう意味でも、アート・コミュニケーション事業という様々な世代の様々なバックボーンを持つ市民参加は、三鷹市の現状の課題を好転させる大きな可能性があり、そのうえでこれまでの三鷹市がこれまで行って来ているコミュニティ行政の視点、市民が主体に活動が行われることと同じ方向を向いて、“参加と協働”というキーワードにも沿う形で新たなプラスの要素として提案できるものになるのではと考える。

既存の組織されたコミュニティを変えることは簡単ではないが、現状の方向性に沿う形で、あらたなプラットフォームを行政が主体となって、積極的に様々な世代の市民参加が実現する構造改革につなげたい。

## 5.2 三鷹市美術ギャラリーについて

三鷹市美術ギャラリー（指定管理者：公益財団法人三鷹市スポーツと文化財団）は、「人にやさしいまちづくり」の実現を目指すための文化ネットワークの一環として、交通至便な三鷹駅前商業棟 CORAL5 階に 1993 年（平成 5 年）10 月開館。令和元年度は 2 つの展覧会で 8752 名（内有料 4512 名）が来場している。（会期日数 118 日、一日平均 74 名）（公益財団法人 三鷹市スポーツと文化財団 2020：18）

三鷹市へのアート・コミュニケーション事業の導入提案にあたり、地域美術館の現状について把握するため、三鷹市を代表する公立美術館である三鷹市美術ギャラリー主任学芸員の大竹ゆき氏に聞き取り調査を行った。

## ■インタビュー

日時：2020 年 10 月 23 日（金）15 時～16 時 30 分

場所：三鷹ネットワーク大学

インタビュー形式：対面（他のまちづくり研究員一名と合同インタビュー）

インタビュー技法：非構造化インタビュー（スクリプト未作成）

インタビュー相手：大竹ゆき（三鷹市美術ギャラリー主任学芸員）

インタビュー目的：三鷹市美術ギャラリーの現状と教育普及事業の把握

### ① 現状の体制について

- ・三鷹市美術ギャラリーの固有職員は 4 名。
- ・企画、教育普及など役割分担はあるが、少数であるため、お互いに協力して業務を行っている。
- ・土日や夜間も開館しているため、人員補助としてアルバイトに出勤してもらい、資料整理などできることを行ってもらっている。
- ・企画展会期中は会場監視、受付業務のため 15～20 名のアルバイトがシフト制で勤務。（一日あたり 6～8 名程度）
- ・展示室の一般貸出や他施設の貸出受付は業務委託。

### ② 現状の教育普及事業について

- ・昨年度は総合学習授業として、出張事業「展覧会ができるまで」、小学生対象のギャラリートークを行った。（三鷹市立第四小学校、三鷹市立高山小学校）学校教育との関わりは、全体にギャラリーの年間計画などはお伝えする中で、各校の予定も考慮しながら、個別に打ち合わせを行って実施しているため、市内の小中学校全校一律でなどは行っていない。
- ・小学生対象のギャラリートークでは、ボランティアにファシリテーターをしてもらい、対話型鑑賞（VTS）を取り入れた「対話型ギャラリートーク」を実施している。ギャラリートークをするボランティアは、現状 20 名程度はいるので、常時募集しているわけではない。また、一般の来館者が比較的少ない平日の午前中に行われることが多い。
- ・三鷹市美術ギャラリーが美術との出会いのきっかけになるようなプログラムを用意し、多くの方に来てもらいたいと強く思うが、美術に全く興味がない人をただ美術館に来させるようなイベント的な内容ではなく、きっかけから興味に発展するよ



うなプログラムをつくっていききたいという思いもある。学校の先生も転勤が多いので、継続する難しさもあるし、逆に興味をもってくれている先生とはどこにいても一緒に行える関係性ができたりする。

- ・学校との連携については、美術館という非日常を経験してもらうことで、子どもたちの学校では見せない一面を見ることができる他、先生以外の大人との時間という意味でも貴重な機会になっている。

聞き取り調査を行って、まずは、三鷹市美術ギャラリーの体制として、固有職員は4名と少数精鋭で運営されていること、その中でも年2回の企画展示、学校との連携等広く活動が行われていることを認識することができた。

また、学校教育と連携した出張授業や小学生が来館して美術館内のギャラリートークが全校ではないが要望に応じて実施されていること、そして、作品解説を行うボランティアのファシリテーターの存在があることを知ることができた。限られた体制ではあるが、美術館としての教育普及事業を実施することで、より多くの人に来館して欲しいという思いが実践として行われていることがわかった。

アート・コミュニケーション事業の導入により、現状の改善、手助けになる部分を考えるならば、現状の固有職員4名とボランティアによる運営に、ボランティアな活動であっても、能動的に活動するアート・コミュニケータを組織化することで、職員と一緒に三鷹市美術ギャラリーを考え、ともにつくっていくような活動を作り出せるのではないかと考える。

個人的には学校教育の場面で児童に選択するチャンスがなく、大人の都合でアートに触れる機会がなくなることは、特に三鷹市美術ギャラリーというしっかりとした活動をしている町の財産があるからこそ残念であるし、少しでも多くの子どもたちにアートに触れる機会を提供したい。そのためにも三鷹市美術ギャラリーの良質な取り組みをサポートし、後押しできるような活動をアート・コミュニケーション事業の導入という形で実現できれば、現状を少しでも良い方向に向けることができるだろう。

### 5.3 アート・コミュニケーション事業導入提案

東京都美術館、東京藝術大学が行っているソーシャルデザインプロジェクトを同じ規模で、同じように展開するのは非常に困難であるが、アート・コミュニケーション事業の広がりとして紹介したとおり、その社会的意義や取組みへの共感は多くの地域に伝播している。

アート・コミュニケーション事業について、各地への広がりにはこれといった型ではなく、その地域ごとに工夫が見られ、様々な形で推進されていることも示したとおりであるが、三鷹市にとってできること、できる範囲を見極めてでも、出来る形で実現していくことを提案したい。

三鷹市の文化政策についても、現状を否定するものではなく、現状に沿う形でアート・コミュニケーション事業の導入を検討できると考えている。

第一段階として、対話型鑑賞(VTS)の実践を通じたアート・コミュニケーションの普及啓発、短期的には、対話型鑑賞(VTS)をサポートする任期付きのアート・コミュニケータの育成していくことを活動の中心に据えて、三鷹市美術ギャラリーをはじめとした既存の美術館や博物館に負担とならない範囲で共存共栄できるような活動の在り方を模索できればと考える。

対話型鑑賞(VTS)は、1980年代に当時ニューヨーク近代美術館で教育部長を務めていたフィリップ・ヤノウインと認知心理学者のアビゲイル・ハウゼンら研究チームによって開発された鑑賞教育プログラムに端を発した子ども向けに開発された美術の鑑賞方法で、2000年前後から日本でも美術館の教育プログラムや学校教育の場でも取り入れられている。近年ではビジネス領域や認知症、高齢者のケアへも展開を進めており、その特徴は美術の知識に頼らずに、ファシリテーターと呼ばれる進行役との対話を通じて、作品を鑑賞し、観察力や批判的思考力、コミュニケーション力といった総合的な生きる力を醸成する。

第二段階として、そういった活動を通じてコミュニティとして組織化を目指したい。アート・コミュニケータの育成を中心としたアート・コミュニケーション事業の導入、組織化は、地域共生社会を体現する様々な年代の様々なバックボーンをもった市民参加が実現し、それぞれにとっての第三の場となる。

そしてそこから展開する事業の多くは幅広い世代にとっての社会包摂の場になるだろう。

三鷹市や三鷹市スポーツと文化財団といった公益事業として、組織を形成し、将来的に三鷹市のシンボルとなるようなものとして、市民の多くと関わりあいながら核となる事業としてアート・コミュニケーション事業を行う組織ができれば、とびらプロジェクトのような継続的な活動になっていくのではないかと考えている。

第三段階として、そういった活動のひとつとして、具体的に提案したいのが、学校教育の場における対話型鑑賞（VTS）の実践である。

対話型鑑賞（VTS）の効果について、開発者の一人でもあるヤノウインは、「子どもにとって VTS はさまざまな能力、たとえば、ヴィジュアル・リテラシー<sup>9)</sup>や複合的な思考力と、それを伝えるための言語能力、傾聴力、書くことへの関心と記述力、さらには協働的な問題解決能力などを培う基盤となる」（ヤノウイン 2015 : 12）と述べている。単に美術教育のための場ではなく、子どもたちにとって思考力を育てる場になることが期待できるだろう。アート・コミュニケータとなった市民の実践の場として、現状三鷹市美術ギャラリーが行っている活動を補完できるような活動になればよいと考えている。

同様に、超高齢化社会が進む中で、認知症対策、高齢者のケアとしても対話型鑑賞（VTS）が実践され、高齢者から子どもたちまで、様々なアート・コミュニケータの実践の場を広げていくこと、アクセシビリティに配慮して多様な人々と美術館をつなぐ役割としてのアート・コミュニケータが存在し、アートを介したコミュニケーションが生まれるようになれば活動自体が地域における財産になっていくだろう。

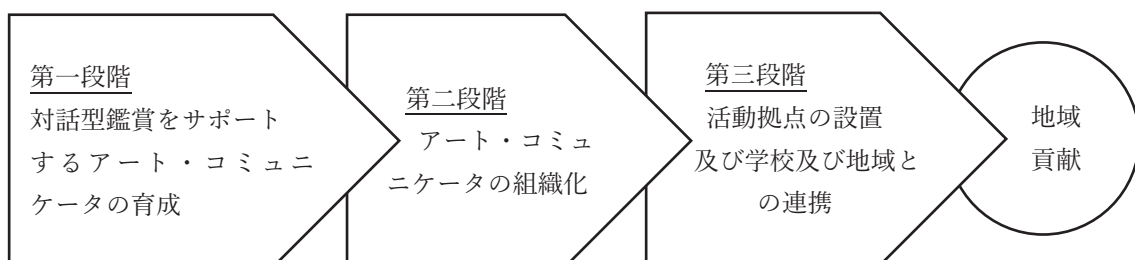
また、三鷹市には、三鷹市美術ギャラリーはじめ、中近東文化センター附属博物館、東京都美術館と同じく前川國男によって設計された国際基督教大学博

物館湯浅八郎記念館、三鷹市立アニメーション美術館（三鷹の森ジブリ美術館）といった博物館施設、三鷹市山本有三記念館などといった建築としても魅力的な文化施設が多数ある。将来的にはそういった環境を活動の舞台として、広くアート・コミュニケータが関わることができればより一層地域における「人」と「場」をつなぐ活動になっていくのではないかと。

さらに、三鷹ネットワーク大学は、教育・研究機関の地域への開放と、地域社会における知的ニーズを融合し、民学産公の協働による新しい形の「地域の大学」をめざすという目的のもと、様々なネットワークを築いてきていることもあり、これまで築いたネットワークを活かすような関わり方も期待したい。

三鷹駅前では三鷹駅南口中央通り東地区再開発事業「子どもの森（仮称）」が予定されている。イメージコンセプトとして、子どもたちが楽しいと思える空間、親子、祖父母をはじめとしたさまざまな世代の人が気軽にまちに出かけ、子どもたちと一緒にすごすることができる空間、家族や友人グループなどさまざまな世代が日常的に一緒に買い物や食事、娯楽、学びを楽しめる空間、誰もがのびのびと落ち着いて過ごせる空間、子育てや介護など、日常の悩みを共有できる空間、自然とともに人やまちが成長できる空間、バリアフリーに配慮し、障がい者にとっても安心して過ごせる空間といった想定がしめされている（三鷹市 2019）が、おおむねアート・コミュニケーション事業の一面として示してきたサードプレイスや社会包摂といったものとの親和性が高いと感じている。子どもの森に活動の拠点を設置することができれば、立地としても三鷹市美術ギャラリーや三鷹ネットワーク大学と連携を深めながら発展していけるのではないだろうか。

三鷹市が「アート・コミュニケータのいる町」となり、子どもの森を活動拠点に学校教育の現場、高



齢者施設、福祉施設などと広く連携し、まちの財産としての美術館や博物館施設を活用したアート・コミュニケーションが生まれ、市民が集い、市民がつくるアート・コミュニケーション事業が地域貢献の大きな動きとなることを小さな一歩からでも進めていけることを望みたい。

最後に、導入提案に差し当たり、アート・コミュニケーション事業の推進に寄与する文化庁の事業を紹介したい。文化庁は博物館が核となって実施する地域文化の発信や子供や高齢者等あらゆる者が参加できるプログラム、学校教育等との連携によるアウトリーチ活動、新たな機能の創造等を支援することによって、文化芸術立国の実現に資することを目的として、地域と共働した博物館創造活動支援事業<sup>10)</sup>を行っており、こうした経済的な支援は三鷹市にアート・コミュニケーション事業を推進するにあたり、一助となるだろう。

## 6 おわりに

2020年新型コロナウイルス感染症の流行拡大に伴い、DX（デジタルトランスフォーメーション）<sup>11)</sup>時代と呼ばれる今日の日常のデジタル化は強制的に、加速度的に進んだが、一方で他人との接触を控えることがよしとされ、これまで当たり前であった人とのふれあい、会話、コミュニケーションが生きていくうえでいかに重要であったかを考えさせられる時間でもあったように思う。また、不要不急なものや必要不可欠なものに大別され、不要不急は控えるようにと言われて必要不可欠なものだけの生活となった時に、あらためてそれぞれの人にとって不要不急の中にも生きていく上で大事なものがあることに気づいたりする時間であったのではないだろうか。個人に留まらず、コミュニティの在り方や考え方も、より考えさせられるテーマとなっているだろう。

今回、地域共生社会における美術館の在り方と公共性について考えるにあたり、一番伝えなかったことは、コミュニティの在り方や居場所である。

アート・コミュニケーション事業は、老若男女様々な人たちの参加が可能で、多くの人にとっての「居場所」になる大きな可能性があると思っている。三鷹のまちに、アート・コミュニケータが続々と誕生

し、アートを介したソーシャルデザインプロジェクトが行われることは、地域にとっての財産になり、多くの市民にとって市民参加の場、第三の場、そして居場所となっていくことを願いたい。

あえて懸念を挙げるとすると、その効果が短期間で目に見えて現れる結果がでるものではないことである。そういう意味でも、三鷹市（行政）が主体となり、実践が行われることが望ましいと考えている。また、地域と大学をつないできた三鷹ネットワーク大学はじめ、地域の大学とも連動する取り組みになることができれば、さらに発展的にアートを介したソーシャルデザインプロジェクトの実践になり、活動を通じて地域共生社会における美術館の在り方や公共性をより未来志向で体现するものとなっていくだろう。

行政が主体となった地道に地域に根差した活動にしたいという意味では三鷹市には三鷹の森ジブリ美術館があるが、三鷹の森ジブリ美術館を活動の拠点にして、スタジオジブリのブランドに頼った活動を行い、スタジオジブリ作品のファンやアニメーションのファンだけが集う場にはしたくない。アート・コミュニケーション事業の本質をとらえ、三鷹市の様々な施設と関わり合いながら、三鷹市全体を舞台にした活動にするためにも、公の中立的な活動の拠点を設け、地味であっても着実に地域の文化として醸成していくことに大きな意味があると思っている。

今回のまちづくり提案として文章を書く機会を与えていただいたが、内容的に概略を伝えることに留まってしまったことが反省点である。根拠や説得力を示すうえで、本来であれば対話型鑑賞（VTS）の実践を通して、参加者や市民の意見をアンケートなどで集め、その需要や期待を示したかったが、新型コロナウイルス感染症の流行拡大に伴い断念した為、この提案を具体的な数値や市民の声をもって示すことができなかった。

ただ、リサーチクエスチョンに示したような「市民が集い、市民がつくる美術館を三鷹市に実現するには」という意味では、とびらプロジェクトという現在進行形で美術館の新しい形を模索している東京都美術館、東京藝術大学の取り組みを紹介することで一端を示し、それは決して東京都美術館だから出来ることではなく、その取り組みがそれぞれの地域

の特色に合わせて形を変えながらも、様々な地域に伝播していることを示すことで、三鷹市ではできないことではないことを伝え、議論のきっかけになるような種は提示できたのではないかと思っている。アート・コミュニケーション事業が少しでも多くの方に認識される機会となり、こういった活動の必要性を感じてもらうことで、ぜひ三鷹市にもという声につながれば幸いである。

最後に、伊藤寿朗は、「参加・体験」を運営の軸とする第三世代化の実現は、学芸員の体制、施設・設備の条件が整った、県立レベルの大型館が有利にみえる。しかし第三世代化がめざしているのは、市民の主体的な“参加・体験”による、自己学習能力の育成であり、市民と博物館が協同して新しい価値を発見し、またつくりだしていくところに、その本質がある。その点から、市民の日常的な活用が可能であり、また市民へのフィードバックが可能な、地域の中小的博物館こそが、第三世代化の舞台にふさわしい。」(伊藤 1993 : 153) と述べている。

三鷹市でアートを介したソーシャルデザインプロジェクトが実現し、市民による市民のためのアート・コミュニケーション事業により幅広い世代が参加可能な活動が行われることで誰かにとっての居場所となり、美術館に多くの人が集い、関わりあいながら、活動やにぎわいが生まれることで誰かにとっての居場所ができることを願っている。

末筆ながら、本稿の執筆に際し、インタビューの機会をいただき、聞き取り調査にご協力いただいた三鷹市スポーツと文化部芸術文化課長の井上仁氏、三鷹市美術ギャラリー主任学芸員の大竹ゆき氏に深く感謝申し上げます。

#### [注]

- 1) 『『地域共生社会』の実現に向けて(当面の改革工程)』2017年厚生労働省「我が事・丸ごと」地域共生社会実現本部決定
- 2) 『『地域共生社会』の実現に向けて(当面の改革工程)』2017年厚生労働省「我が事・丸ごと」地域共生社会実現本部決定
- 3) International Council of Museum; 国際博物館会議
- 4) 違いのある人たちを、違いを尊重したまま受け入れる社会を目指そうという考え方
- 5) アメリカの社会学者レイ・オルデンバーグが定義するコミュニティにおいて自宅や職場とはかけ離れた心

地の良い第3の居場所

- 6) とびラーはとびらプロジェクトに参加するアート・コミュニケータの通称
- 7) アート・コミュニケータ、アートコミュニケーター、アートコミュニケータの表記については、統一せずに、各所それぞれの表記をそのまま採用している。
- 8) エコミュージアム (Ecomuseum) とは、エコロジー (生態学) とミュージアム (博物館) とをつなぎ合わせた造語で、ある一定の地域において、住民の参加によって、その地域で受け継がれてきた自然や文化、生活様式を含めた環境を、総体として永続的な (持続可能な) 方法で研究・保存・展示・活用していくという考え方、またその実践
- 9) 絵や写真、図表、動画などといった視覚的なテキストを読み解き、発信する能力
- 10) 文化庁地域と共働した博物館創造活動支援事業 <https://chiikitokyodo.bunka.go.jp/>
- 11) 2004年にスウェーデンのウメオ大学教授、エリック・ストルターマンが提唱したITの浸透が、人々の生活をあらゆる面でより良い方向に変化させるという概念。

#### [文献]

- 伊藤寿朗, 1991, 『ひらけ、博物館』, 岩波書店
- 伊藤寿朗, 1993, 『市民のなかの博物館』, 吉川弘文館
- 稲庭彩和子, 伊藤達矢, 2018, 『美術館と大学と市民がつくるソーシャルデザインプロジェクト』, 青幻舎
- これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議, 2007, 『新しい時代の博物館制度の在り方』文部科学省ホームページ (2020年10月10日取得 [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shougai/014/toushin/07061901.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/014/toushin/07061901.pdf))
- とびらプロジェクト, 2020, とびらプロジェクトホームページ (2020年10月17日取得 <https://tobira-project.info/about/>)
- 西沢立衛, 2010, 『美術館をめぐる対話』, 集英社
- 八戸市, 2020, 『八戸市新美術館 中期運営計画』(2020年11月14日取得 <https://www.city.hachinohe.aomori.jp/material/files/group/11/tyukiuneikeikaku.pdf>)
- フィリップ・ヤノウィン, 2015, 『どこからそう思う? 学力をのばす美術鑑賞』, 淡交社
- 文化制度部会, 2007, 『東京都美術館が取り組むべき新規事業の内容とその規模〜「人間にとっての表現の意味」を追求する新・東京都美術館を目指して〜』(2020年10月15日取得 [https://www.seikatubunka.metro.tokyo.lg.jp/bunka/bunka\\_seisaku/files/0000000200/bunkaseido\\_kentoubukai-houkoku.pdf](https://www.seikatubunka.metro.tokyo.lg.jp/bunka/bunka_seisaku/files/0000000200/bunkaseido_kentoubukai-houkoku.pdf))
- 文化庁, 2018, 『文化芸術推進基本計画ー文化芸術の「多様な価値」を活かして、未来をつくるー』文化庁ホームページ (2020年10月15日取得

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\\_gyosei/hoshin/pdf/r1389480\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/hoshin/pdf/r1389480_01.pdf)

三鷹市, 2020, 『第4次三鷹基本計画(第2次改定)』(2020年11月27日取得)

[https://www.city.mitaka.lg.jp/c\\_service/085/attached/attach\\_85901\\_2.pdf](https://www.city.mitaka.lg.jp/c_service/085/attached/attach_85901_2.pdf)

公益財団法人三鷹市スポーツと文化財団, 2020, 『令和元年度事業報告書』(2020年11月28日取得)

[https://mitaka-sportsandculture.or.jp/\\_files/00015035/r1\\_hokoku.pdf](https://mitaka-sportsandculture.or.jp/_files/00015035/r1_hokoku.pdf)

レイ・オルデンバーグ, 2013, 『サードプレイス コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』, みすず書房

#### [参考文献]

宇部市うーばープロジェクト <https://ubaer.jimdosite.com/>

岐阜県美術館 <https://kenbi.pref.gifu.lg.jp/ac/>

札幌芸術文化センター <https://www.sapporo-community-plaza.jp/artcommunicator.php>

たいけん美じゅつ場 VIVA <https://www.viva-toride.com/>

東京都美術館×東京藝術大学とびらプロジェクト <https://tobira-project.info/about/>

長野県立美術館 <https://nagano.art.museum/art-communicator>

---

## プロフィール

### 中嶋 厚樹

株式会社スタジオジブリ 学芸員。2019年度より東京都美術館、東京藝術大学、市民がつくるアートを介したソーシャルデザインプロジェクト「とびらプロジェクト」に参加し、アート・コミュニケータとして活動している。研究の動機は、同プロジェクトに参加する中で、世代も、職業も様々な人々との交流を通じて居場所としてのアート・コミュニケーション事業の可能性を感じ、三鷹市のまちづくりに活かすことができるのではないかと考えたため。今年度はアート・コミュニケーション事業の社会的意義について、三鷹ネットワーク大学「民学産公」協働研究事業に取り組んでいる。

---